

園長通信

(令和7年度5月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長 岡部 祐輝

【新たな学年/クラスの中で何を感じているか】

新年度に入り、気づけば4月が終了となりました。子ども達はそれぞれが新たな環境で過ごす中で、「わくわく/期待」などの思いだけではなく、「どきどき/不安/戸惑い/我慢/葛藤」などの思いも混ざった中で4月であったと思います。また時には、辛く感じたり、自分ではなかなか処理できないことが起こったりする中で涙することもしばしばみられます。これらは、ぱっとその場面だけを切り取ると、「幼稚園での生活、楽しくないのだろうか？この姿はどのような育ちにつながるのだろうか？」と不安になられる保護者の方もおられることと思います。

しかし、その中には大きな育ちの意味が含まれていることが多くあります。

この時期に園でできる限り大切にしようと考えていることは、「援助を要請していいということ子どもが感じられること」、「何か援助要請をしたときに、ともに歩んでくれた他者がいた経験を行うこと」と考えます。

しかし、大変申し訳ないことではありますが、幼稚園は大きな集団での生活であるため、家庭に比べ、子どもが援助要請をしてもタイムリーかつ個別性の高い方法で対応することは時に難しいこともあります。ただ、そのような中でも家庭以外で、もしかすると、はじめて多くの時間を過ごすかもしれない大人が、「何かあったときに自分とともに考え動いてくれる」という経験や、「自分がしたことを一緒になって面白がってくれる」という経験が、とても重要な時期であると思います。

上記の内容は一見、「子どもの要求に全て応じる」、「子どものいかなるアイデアや行動に対しても指示などをせず受け止める」というように捉えられる方もおられるかもしれませんが、私たちは決してそれだけではないと考えています。

例えばかなり極端な例ですが

「私（A）は、素材や玩具を使って作りたいものがある。それを作るためにはBちゃんが持っている素材や玩具を使いたい。だから私はBちゃんの使っているものを取っても問題はないんだ。」

このような状況でも、A児の要望をすべて受け止めるだけでいいのでしょうか。仮にA児の要求や主張だけを受容した場合、B児が成し遂げようとしている機会を奪うだけではなく、物理的に使用している素材や玩具が使用できない状態に陥ります。このように、社会生活や集団生活の中では、自分の「自由や権利」を行使しようとしたときに、それが誰か他者の「自由や権利」を奪ったり、侵害したりしてしまうということは、大なり小なりよく見られるものと考えます。このような時は、立ち止まって子どもたちと考える時があります。

集団生活を経験する幼稚園では、もしかすると、人生で初めての「子どもなりの理不尽さ」を経験しているかもしれません。

なかなか伝えたいことや相手にわかってほしいことをうまく主張できない場合、手が出るなど強い手段、方法で行動し伝えようとする場合がありますが、徐々にこの行動に「言葉」や、「言葉と合わせて用いる行動（例：ごめんねと言いながら申し訳なさそうな表情をするなど）」などが見られることがあります。

またこのような場面で、保育者や周囲の大人が、「審判」として状況をジャッジするのではなく、お互いの伝えたいことを受け止め整理し、発達とともに、徐々に相手の考えや思いを代弁したり伝えられる援助をしたりすることが大切になってきます。そのような中で、「相手の自由や権利」について考えていくことは幼児期だけで培いきれるものではなく、小学校進学以降の経験も非常に重要となります。

「学校」をつくり直す（苫野一徳,2019,河出書房新社）では、以下のように述べられています。（以下引用文）

「教育は、すべての子どもに「自由の相互承認」の感度を育むことを土台に、すべての子どもが「自由」に生きられるための“力”を育むためにあるのです。」

発達の過程では、2~3歳頃は特に自己中心性が高いことが言われています。そして徐々に自己主張だけでなく、自己抑制が育ち、自分を俯瞰的に、客観的にとらえていく力が育っていきます。

4月は特に、「自己主張」、「要求」が、様々な形で子どもたちの中で見られます。園でも「受け止めるだけではなく時に立ち止まる」ことや、「それはどうなんだろう」とあえて子どもと一緒に考える問いを投げる援助を行うことも、今後あると思います。ぜひご家庭とともに、教育や保育の考えを共有し、進んでいきたいと思いますのでご支援、ご協力よろしくお願いいたします。